

FREE MAD レクチャースクリプト

シリーズ名 | 1900-1907 – 夢想家と荒くれ者たち (5 レクチャー)
「1900a フロイトの精神分析学とグスタフ・クリムトの表現芸術」

講師 ロジャー・マクドナルド (AIT / Total Arts Studies プログラム・ディレクター)
制作 NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]

URL : <https://youtu.be/JgrsmQC36fw> (31:30 / YouTube) [2012 年制作]

参考文献 : 『Art Since 1900』 Thames & Hudson (March 30, 2005)

はじめに

2012 年 1 月、NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]の設立 10 周年を記念して、これまでに蓄積した知識や経験を多くの人と共有し、混迷する時代においてなおアートが必要であることを広く伝えていきたいとの思いから、それまでに有料だったレクチャー・シリーズ (E-MAD) を、「FREE MAD」に名称を改め、動画の無料公開を始めました。

昨年の 2020 年、動画に字幕をつけてほしいというリクエストを受けたことをきっかけに、すぐに AIT ができることとして、各シリーズを文字に書き起こし、このレクチャースクリプトを作成しました。

「FREE MAD」とは

1900 年から 100 年間のアートの旅をめぐるオンライン レクチャー・シリーズ。ナビゲーターである AIT のロジャー・マクドナルドが、英国で出版された 20 世紀芸術の概説書『1900 年以後の芸術：モダニズム、アンチモダニズム、ポストモダニズム (Art Since 1900)』*をもとに、テーマごとにアートの歴史を読み解いていきます。

パブロ・ピカソの《アヴィニョンの娘たち》やマルセル・デュシャンの《泉》、また、ロシア構成主義など、世界のアートの歩みに大きな衝撃を与えた 1900 年から 1968 年までの運動や思想、作品、批評を 80 本のレクチャーとして随時公開しています(2021 年現在)。URL : <http://mad.a-i-t.net/category/freemad/>

*公開当時、概説書は英語のみでしたが、現在では日本語訳も出版されています。
(概説書『Art Since 1900 図鑑 1900 年以後の芸術』2019 年 6 月発売、東京書籍)

* 「MAD」は、AIT が 2001 年から 2019 年まで開講した現代アートの教育プログラム「MAD (Making Art Different=アートを変えよう、違った角度で見てみよう)」の名称です。

* 本レクチャー内容に関するご質問は受け付けておりません。

NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]について

2001 年、現代アートに興味がある誰もが学び、対話し、思考するプラットフォームづくりを目指して、6 名のキュレーターとアート・マネジャーが立ち上げた非営利団体です (2002 年法人化)。個人や企業、財団あるいは行政と連携しながら、現代アートの複雑さや多様さ、驚きや楽しみを伝え、それらの背景にある文化について話し合う場を、さまざまなプログラムとおして創り出しています。AIT は、芸術を、より複雑で感覚的で、これからの時代を生きぬく想像力を養う「道具」として捉え、芸術が果たしうる役割と未来について考え、行動を起こしていきます。 URL : <http://www.a-i-t.net/>

本資料は、FREE MAD 動画レクチャーを書き起こした著作物につき、個人使用目的以外の無断転載、複製、改変、再配布はご遠慮ください。
作成 NPO 法人アーツイニシアティヴトウキョウ[AIT/エイト]

皆さん、こんにちは。AIT のロジャーです。『Art Since 1900』によろこそ。今日はパート 1、1900 年 a の最初になります。これから、100 年にわたる長い本を読んでいきたいと思います。約 2 年かけて読むという目的なので、ぜひこの旅と一緒に出ましょう。よろしくお願いします。

まず、この『Art Since 1900』は、非常に分厚い本です。2000 年代に入ってから、英語圏、特にヨーロッパ、アメリカの美術大学で美術史を教えるための道具として、盛んに導入されています。いわば、今までゴンブリッチが西洋美術史のマイスター的な作家であったとしたら、『Art Since 1900』という、この本はゴンブリッチの後、20 世紀美術史を最も象徴的に描いてきた本ではないでしょうか。今日は 1900a を見ていきたいと思うので、よろしくお願いします。

1900a に出てくるサブコピーを読んでいます。

“Sigmund Freud publishes The Interpretation of Dream: in Vienna the rise of the expressive art of Gustav Klimt, Egon Schile, and Oskar Kokoschka coincides with the emergence of psychoanalysis.”

これがこのチャプターの最も重要なポイントです。オーストリアのウィーンが、このセクションの物語が起こる主な場所です。そして、心理学の父ともいわれているジークムント・フロイトが、1900 年に『夢判断』を出版します。そこで、心理分析という新たな人間の「無意識」を見ていく学問が生まれました。この年に、ウィーンでは非常に重要で複雑な芸術運動、そして心理分析という新たな学問が生まれたという形です。

部分的に示しながら、読んでいきたいと思います。ファーストパラグラフを簡単に言うと、フロイトの『夢判断』とウィーンのアーティストたち、クリムト、シーレ、ココシュカを結ぶということが、まず、このチャプターのポイントです。（彼らを）結ぶ材料の最も重要なキーワードとして、「無意識」があります。

“The connection between these four Viennese contemporaries is better drawn through the notion of the ‘dreamwork’ developed by Freud in ‘The Interpretation of Dreams’.”

『夢判断』というフロイトの本の中で、ドリームワーク、「夢」というものについての定義、そして分析が行われます。「夢」という言葉を通して、ウィーンの 3 人のアーティストたちの活動を見ていこうというものです。ここで、フロイトの『夢判断』で出てくる「夢」という定義が少し引用されています。

“ a dream is a ‘rebus,’ a broken narrative-in-images, a secret wish struggling to be expressed”

「リーバス」、これはパズルという言葉です。夢はパズルのようなものだという事です。壊れたイメージの物語のようなものです。もしくは、表現されようとして戦っている、秘密の希望が表現されるために戦っています。もしくは、内面的に抑圧されている何かが常に抑えられているというような形で、フロイトはドリームワークというものを考えています。

“a struggle between expression and repression in sitter and painter alike.”

ウィーンで活躍しているアーティストたちの作品からは、表現、そして抑圧的なもの、その間にある戦いというものが見られるのではないかと言及しています。モダンアートのスタイルの中で、ウィーンのこの作家たちの作品は、見る側が心理分析者のポジションになるということが言及されています。

次のチャプターでは、もう少し美術史的なことが書いてあります。パリが最も盛んなモダンアートの首都であったとしたら、ウィーンはパラダイムシフト的な世紀末に運動が起こった場所であったということが書いてあります。最もそれを表す言葉として、「セセッション」という言葉が出てきます。日本語に訳すと、「ウィーン分離派」と訳されると思います。

「セセッション」という言葉があります。1897年に、当時のウィーンの芸術院、アカデミー・オブ・ファインアーツから撤退するということをセセッション、分離派という表現で語っています。当時の芸術院から、19人のアーティストが撤退しました。クリムトやヨゼフ・マリア・オルブリッヒ、ヨーゼフ・ホフマンのような建築家も分離派のメンバーです。この辺りを読んでみると、それが記されています。

“In opposition to the old academic guard, the Secession advocated the new and the youthful in the very names of the international style that it adopted,”

古い芸術院的なものに対して、セセッションは新しさ、若さ、そして新たな国際的なスタイルで、フランスではアール・ヌーヴォー、ドイツではユーゲント・シュティール、若いスタイルという形で語られています。当然、いろいろなスキャンダルを起こしたということも書いてあります。例えば1908年にオスカー・ココシュカというアーティストがウィーンのスクール・オブ・アーツ・アンド・クラフツ、美術大学から退学を命じられます。彼は非常にスキャンダラスのパフォーマンスをすることによって、大学から追い出されました。ウィーン分離派は、さまざまなスキャンダルを呼び起こしたそうです。

世紀末の時代にウィーンに分離派が表れることは何を示しているかという
と、この辺りの記述になります。

“For the new art emerged as the Austro-Hungarian Empire was collapsing; it was symptomatic, the historian Carl E. Schorske has suggested, of ‘the crisis of the liberal ego’ in the old order.”

新しい芸術表現は、まさにオーストリア、ハンガリー帝国が崩壊しつつある
ときに表れたものです。そして、何らかの象徴であるということです。

何の象徴かということ、中流階級もしくは伝統的な秩序をずっと支えてきた、
ブルジョア階級の危機的な状況を示しているのではないかということです。

このページには、ヨゼフ・マリア・オルブリッヒ、《House of the Vienna Secession /セセッション館》、1898年が掲載されています。セセッションは、非常に興味深いもので、このように自分たちの芸術運動を支える、新たな建築物を作りました。このイメージを見ると、ウィーンを中心部に、当時、そして現在見ても、斬新な要素のある建築物を作りました。非常に面白いと思うのは、建築物の正面に窓がないことです。当時のウィーン文化に対して、フラットな壁で、反対というものを建築で象徴しているようにも私には思えます。

次のページです。セセッションは、若い運動として出てきますが、当然、スムーズな運動ではありません。この辺りのパラグラフで、セセッションの中でも、いろいろな派閥的な差異もあったと書かれています。もちろん、セセッションと古い芸術院、アカデミーは大きく分かれています。セセッションの中でも、差異があるそうです。例えば、クリムトというアーティストは、完全芸術のようなものに対して憧れを持っていて、それに向かって宣言を出していきます。

内部的な分離もある一方、クラフト的な要素を最も重要視する人たちも存在します。その人たちは、デコラティブ・アーツ、装飾芸術というものを掲げていきます。一方では、装飾性に対して不安を持った、アブストラクション、抽象芸術を掲げるセセッションのアーティストも存在します。内部的にも分かれているということです。フィギュレーションとアブストラクション、具象的に肉体を描くスタイル、抽象的に向かうスタイル、二つの方法がセセッションの中にもあるということです。

この辺りの部分も面白いです。ドイツの批評家のヴァルター・ベンヤミンもいち早く、アール・ヌーヴォー、ウィーン分離派について言及しています。彼はここでポイントを出しています。まさにウィーンで起こった分離派運動は、特にこの最後の辺りがポイントだと思います。

“It represented the last attempt at asortie on the part of Art imprisoned by technical advance within her ivory tower. It mobilized all the reserve forces of interiority. They found their expression in the mediumistic language of line, in the flower as symbol of the naked, vegetable Nature that confronted the technologically armed environment.”

ベンヤミンの分析はなかなか面白いです。分離派のアーティストたちは、最後の一種のアートを守る瞬間にあったということです。作家たちは内面世界に一回、戻って、線や花、自然界などを表現しています。この自然界は意味があって、テクノロジーが増えている環境に対する反発としてというものです。裸を象徴する花もそういったものだと書いています。ベンヤミンもこういう形で、ウィーン分離派は、個人主義というキーワードを重要としているのではないかと書いています。

最後のアートからの叫びでありながら、結果としては、この辺りの記述になります。

“Thus, even as the Secession broke with the Academy, it did so only to retreat to a more pristine space of aesthetic autonomy.”

分離派、セセッションはもちろん、芸術院や伝統芸術、アカデミーからの分離ということもありますが、最終的に、純粹で美学の自立性のような空間に引きこもるといふ形で見ることができないかを書いてあります。

そして、ウィーンのエセセッション、分離派の最初のトップになったのは作家のグスタフ・クリムトです。この辺りは、クリムトについて書いてあります。彼はアーティストとして成功していて、1894年にウィーン大学からいろいろなコミッションを依頼されます。

依頼されたのは、天井画です。哲学、医療、そして法を描いてくださいと、大学、まさに権力的な制度から依頼が来ました。約10年かけて、クリムトは大きな作品に取り組みました。1900年の段階では、ウィーンのエセセッション運動にも参加するので、彼の考え方や作品の意味もどんどん変わってきます。提出する完成作品は、大学側が全く予想もしていなかったようなものでした。そこで、またいろいろなスキャンダルが生まれたということが、この辺りに書かれています。

次のページです。こちらは、ウィーン分離派のメンバーでもあった、建築家のヨーゼフ・ホフマンの作品です。クリムトの絵がそのまま建築空間に入っていて、先ほども出てきたような総合的な芸術空間になっています。リビングスペースに家具や建築、そこに飾られる装飾的部分や絵などを置いて、総合的なアート作品として考えようとしたのが、ウィーン分離派です。

そして、クリムトの作品は、こちらのページの上のパラグラフになります
が、結果としてウィーン大学から拒否されてしまいます。最終的に、最後の作
品は法についてのものです。 司法、Jurisprudence と書いてあります。日本
語に訳すと、司法権ということです。最後の《Jurisprudence / 司法》という
作品は、1945年、戦争で焼失してしまいました。イメージとしては、こちら
に示すような作品です。1903年から1907年と書かれています。なかなかすご
い作品だと思います。この作品について、いろいろ書かれています。まるで地
獄絵のようなイメージで描いているのではないかということが、ここに書いて
あります。特にこの辺りのフィギュアについて、言及しています。

このようなクリムトのパブリックアートに対するコミッションが拒否される
ということについて、この辺りのCHAPTERで書かれています。

“Signaled a general crisis in public art at this time, ”

パブリックアートに対する一般的な危機を、実は象徴しているのではないか
ということです。

“Public taste and advanced painting had parted company. ”

ここがポイントだと思います。一般市民たちのテイストと前衛絵画という道
が分かれていっていると、この騒動は示しているのではないかということ
です。クリムトは、この後、ひきこもって、最終的にウィーン社交界のポートレ
ート作品などを手がけるようになります。そうすると、ここに書いてあるよう
に、もっと若いシーレとココシュカという2人が、セセッションの一種の激し
い抑圧との戦いのバトンタッチをさせられたということになります。表現のリー
ダーたちになっていきます。シーレとココシュカは、アール・ヌーヴォーの
装飾的な品の良さのような部分に関して、疑問を示していました。ポスト・イ
ンプレッショニスト、シンボリストの画家たちの表現主義的な方法に、非常に
インスパイアされています。特にゴッホ、ゴーギャン、北欧のムンク、スイス
のフェルディナント・ホドラーといったアーティストたちに、インスパイア、
モチベートされるということも書いてあります。

そして、具体的にシーレとココシュカについて入っていきます。シーレはク
リムトと1907年に会うということが書いてあります。彼は約300のペインテ
ィング、3000のドローイングを残しているアーティストです。主に有名な絵
は、10代の女性、非常に性的な要素を見せているという特徴がある作品です。
もしくは、ほぼヌードになっているセルフポートレート、自画像のようなもの
を多く描き残しているアーティストです。

“Schile probed another Freudian pair of perverse pleasures——voyeurism and exhibitionism. ”

ここで書いてあるのは、シーレの絵を見ると、フロイトの心理分析の中で、異様な快楽を支えている二つの概念から考えることができるのではないかということです。のぞきと何かを見せていく行為という二つがシーレを支えているのではないかと言及されています。

シーレの特徴が出ています。

“But for the most part, Schile does not seem defintatly proud of his self-image so much as pathetically exposed by its damage. ”

シーレのセルフポートレートを見ていくということで、この絵が主に言及されています。自信にあふれている自分を見せるのではなく、逆にまさに弱さ、もしくはダメージされた自分の肉体を仕方なく見せています。弱さを仕方なく見せていく点が、シーレの特徴ではないかということです。自信にあふれている肉体ではないということです。

この下辺りにいきます。

“This transformation of the figure is the primary legacy of Viennese art at this time. ”

このようなポイントも言われています。体をどう描くかということです。体を描く変化が、ウィーン美術家たちが残した最も重要なレガシー、重要な美術にとっての一つの歴史ではないでしょうかということを行っています。

そして、最後のページです。シーレ、そしてウィーン分離派たちは、1900年辺りから30年たった1930年代には、ナチスから完全に批判の対象になり、退廃芸術の対象にもなっています。古典的な人間の体の描き方とは全く別のフィギュアの描き方に言及するということが、まさにここで表れています。

“Here becomes a cipher of psychosexual disturbance. ”

彼らは、心理的、性的な不安や動乱の表れとして、人間のフィギュアを描いているのではないかということです。フロイトからの直接的な影響は及ばず、非常に独特でユニークな、さらにゴッホの表現的な描き方をさらに進めていったような形で、シーレ、ココシュカの作品を見ていくということです。アーティストたちが持っている抑圧を描くのではなく、座っている人たちの抑圧を描いたということがポイントではないかということです。アーティスト本人の内面性だけをキャンバスに出すのではなく、描いている人たちの内面性、抑圧を描くということも特徴ではないかということです。まるでボディが持っているティックス・アンド・テンションです。これもフロイト的な特徴を持っている

フレーズだと思います。これは意識的ではない体の動き、神経だけが勝手に動いてしまうような、抑圧されたものが体に出てしまうという肉体性ということです。

最後にオスカー・ココシュカについての言及があります。特に、ココシュカが描いたものです。ごめんなさい。ここはタイトルが間違っています。今、気が付きました。これはエゴン・シーレではありません。オスカー・ココシュカです。

《Portrait of the Architect Adolf Loos》1909年の絵です。ココシュカが1909年にこのモダン建築の代表的なアドルフ・ロースのポートレートを描くということについての言及です。ロースの描き方は、非常に内面的な肉体的精神性をうまく描いています。面白いと思ったのは、手の描き方です。彼の全てのプレッシャーが、抽象に近いような手のエリアで見事に表していると分析されています。

ロースは、ウィーンの建築界では非常に有名です。アール・ヌーヴォーとセセッションに対する批判的な文章を出しています。1908年、『装飾と犯罪』というタイトルで、非常に厳しく、彼はモダン建築という中で、装飾はもう犯罪に近いという形で、批判的に書いています。それだけではなくて、装飾は、もともとエロチックなものから出てきて、「糞」に近いような要素であるということです。装飾は、倫理的なモラルがなくて、子どもと野蛮な者が遊ぶものであるというぐらい、強い批判を展開します。彼は、装飾を全ての実用的な建築物やインテリアから消し取ることが、モダン建築や芸術が行うべきことであると言っています。装飾を外していくことが、純粹でモダンな建築、芸術に行く道だと話しています。

“The evolution of culture is synonymous with the removal of ornament from utilitarian objects.”

まさにそういうことです。外す、消し取るということです。ロースをココシュカが描いたということも、一つの矛盾を抱えた主題です。そして、その描き方も、最後のパラグラフに出てきます。ウィーンは1900年には一方でクリムトとシーレ、ココシュカのような非常に秩序や伝統を壊していく試みを持った画家たちが登場した場所であると同時に、規律を声に出していった人もいる場所でした。建築的に見ると、今出てきたロース、ジャーナリズムでいうとクラウス、音楽でいうとアルノルト・シェーンベルク、哲学でいうとウィトゲンシュタインといった人物がいます。矛盾を抱えている、非常に重要なパラダイムシフト的なパリと並ぶ都市として、ウィーンという所にフォーカスしています。

“At the beginning of the century, then, we find in Vienna an opposition fundamental to much modernism that followed: an opposition between expressive freedoms and rigorous constraints. ”

世紀末、1900年、20世紀の初めのウィーンという都市だけで、その後、モダニズム全体を見るときに出てくる、二つの対立関係が見えてきます。一方では、自由に表現していくことと同時に、それを抑えようとする秩序の中に制限しようとする力もあります。この対立関係が、ウィーンの中で、そしてウィーン分離派、セセッションの中、アカデミーもしくはロースのような建築家、ウィーン大学から拒否されるクリムトといったエピソードの中から見とれるのではないかという1900aでした。

皆さん、どうでしょうか。なかなかこれは面白いスタートです。これからまだ約100年ありますので、お付き合いをよろしくお願いします。